『行人』論

―現在位相からの遁走―

博士課程三年　関谷由美子

(一)　技法について

『行人』が長野二郎によって語られる物語であることは、次のような事を意味する。つまり二郎は単に照射的な語り手なのではなく、物語を展開させてゆく重要な当事者、すなわち〈体験的〉[注1]語り手であって、読者が見るのは登場人物ではなく、登場人物が見るものだということである。[注2] つまり読者はこの物語を、①二郎の人格および肉体性と、②二郎と二郎の語る人物との関係性に[注3]依拠して読むのである。そしてもう一つは「自分は今になつて取り返す事も償ふ事も出来ない此態度を深く懺悔したいと思ふ。」（兄四十二）などの、既に起ってしまった出来事に対する二郎の悔恨が物語の底流にあり、それが語り手の〈今、此処〉、つまり方位感覚を絶えず規定しているということである。したがって読者が物語の〈実相〉をつかむためには、読者に語りかける者の、一郎に対する感情移入的要素や、回想によって追創造されている要素などの、作者の技法としての〈語りの詐術〉を自明のものとして読んでしまうことを差し控えねばならないのである。例えばお貞さんの結婚式当日の二郎の感想、

> 或はそれ以上に深い事を考へてゐたかも知れない（一郎が――注関谷）。或は凡ての結婚なるものを自ら呪詛しながら、新郎と新婦の手を握らせなければならない仲人の喜劇と悲劇とを同時に感じつゝ坐つてゐたかも知れない。
>
> （傍点関谷以下同様　帰つてから三十六）

のような部分において注目すべきことは、「〜かも知れない」「〜かも知れない」と反復される叙述の形式なのであって、この内容が二郎の憶測を出るものではないことを意識化する必要がある。

二郎は繰り返して、兄一郎が〈立派な学者〉であり、かつ〈女子供的感情家〉であるという二律背反を述べる（兄六・十九・二十一・二十五　帰つてから三十六）。二郎の一郎像は、お直を除いた家族のそれを代表するといってよく、概括するならば、冷淡な外貌の奥底に〈暖め得る〉人間性を秘め、「六づかしい高尚な問題を考へてゐる」（兄十）孤高の学者、というものである。美しい幻想である。とりわけ「六づかしい高尚な問題」のような表現に、語り手二郎の素朴なまなざしの背後の、作者の嘲笑を感じないわけにはゆかない。また、

兄は何か癪に障つた時でも、六づかしい高尚な問題を考へてゐる時でも同じく斯んな様子をするから、自分には一向見分が付かなかつた。

のような、情意的要素の希薄な表現にひそむ作者の揶揄的な傾向に留意するならば、作者が一郎に関する〈幻想〉と〈実体〉という物語的焦点を「純良なる弟」（同四十二）二郎の眼を介在させることによって暗示していると読めるのである。そしてこの、一郎の〈幻想〉と〈実体〉という物語的焦点がこの小説の始めから終りまでを暗に支配しており、また不安定的かつ局限的視点であることをまぬがれない、弟二郎の語りという物語的装置の上を、物語の基本的葛藤である一郎・お直・二郎三者の関係が進捗してゆくとひとまず言い得るのである。

『行人』には、一つの観念や事柄、あるいは一つの言表に対する意味論的機能の多重性とも言うべき方法意識が構造的に貫かれている。この方法は、必然的に、一郎と他の人物達との対話のかみあわなさ、ちぐはぐさとして表われており、[注4] それらを子細に検討することが、長野一郎の顕在化されていない〈実相〉を究明する手がかりとなる。

この問題を考察する端緒として、一郎に関する重要なメッセージを伝えた一郎の友人がなぜ〈Hさん〉という匿名性を必要としたのか、について考えたい。これは明らかに二郎の友人が〈三沢〉という固有名詞をもつこととの対比においてなのである。また「Kという兄の知人」（塵労八）という匿名の例があり、もう一人、二郎の通う「事務所の持主」（帰つてから二十九）がBと呼称されている。このBは「（兄の同僚の）Hの叔父に当る人」と二郎は説明している。つまり一郎の友人Hとの関係においてBという匿名でなければならなかったのである。このように、一郎に近接する関係の他者三人に限ってなぜか匿名で呼ばれるのである。[注5] この事実は〈友人〉という一つの観念に対して、作品内に一郎と二郎の、二つの全く異なる認識が存在することを示しており、それが〈三沢〉〈H〉という二つの記号表現の差異となったのである。一つの対象に対する二つの全く異なる意味論的機能という作者の方法はまた、お直という女性が一郎と二郎とではどのように見え方が違っているかという問題に敷衍される。

お直の〈正体の知れなさ〉に関する一郎と二郎の二人のことばを比べてみると、そこに微妙ではあるが、決定的な差異がある。お直は二郎にとっては「淋しい秋草」（帰つてから五）のような美しい兄嫁であり、また〈謎の女性〉でもあるのだが、それはあくまで男が女に対する場合の人間的な関心のうちにある。けだし〈謎の女性〉とは、男女関係における一つの感動の形式に他ならない。だから二郎は、その謎に「不愉快であるべき筈だのに、却つて愉快」（兄三十八）をいつも感じてしまうのである。ところが一郎にとってのお直は、研究対象としての〈X〉なのである。すなわち「女の容貌」（兄二十）や「肉」（同）を捨象して析出されるところの「スピリツト」（同）だけが一郎のお直に対する関心事となる。

事物の研究とか心理学の説明とか、そんな廻り遠い研究を指すのぢやない。現在自分の眼前に居て、最も親しかるべき筈の

人、其人の心を研究しなければ、居ても立つても居られない

（後略　兄二十）

この引用から明らかなのは、「研究」「心理学」などの語の延長上にお直の「スピリット」の問題がおかれているということである。

講演『中味と形式』（明治四十四年）や明治四十年―四十四・五年頃の断片を通じて、漱石が関心を集中させていたと思われる問題の中に、学者という種族が、人間に向きあう場合の、研究的非人間的傍観者的態度ということ、もう一つは、そのような学者の通弊としての統一癖や抽象化・形式化が、人生における生動する〈中味〉を取り落し勝ちであることの二点がある。[注6] 長野一郎の形象における基本的発想もまさにこの二つの問題の具現化に他ならない。

○云ひ換へれば研究の対象を何處迄も自分から離して眼の前に置かうとする。―中略―相手を研究し相手を知るといふのは離れて知るの意で其物になりすまして之を体得するのとは全く趣が違ふ。

○斯う云ふ分り方で纏め上げたものは器戒的に流れ易いのは当然でありませう。

（『中味と形式』）

この文脈に即して言うならば、一郎のお直研究もまた当然「永久局外者としての研究で当の相手たる人間の性情に共通の脈を打たしてゐない」（同）ものであるばかりでなく、そのような態度が人間性に対する侵犯であることは言うを俟たない。以上、検討してきたことを要約すれば、〈H〉〈K〉〈X〉などの記号が、一郎の現実との関係を象徴していることになる。つまり一郎は、現実とこのような抽象的な関係しか結ばない人物だということである。〈中味〉は問題とならないのである。それは底無しの現実喪失であり、一郎自身が取りも直さず一個の抽象的存在であることを意味する。したがって、家族にとって一郎が「X」（塵労十二）になってゆくのは自明のことなのである。

また次に掲げる断片は、講演『中味と形式』の内容とも重なるもので、〈Professional〉が、この種の理知の作用のもとに、いかに世界を性急に平板化してしまうかを示したものである。

○ {Professional-duty-pain / Amateurs-pleasure} -impartiality-exclude personal inclination-mechanicalization of self.-unity extorted out one's susceptible likings. ―中略― there is no spiritual elememt in stereotyped rules and routines-Justice-regularity etc.

（波線関谷　明治四十三・四年断片）

〈Professional〉とは、個人的な傾向を除外した〈機械化した自我〉であること、それが、人間の、鋭敏でしなやかな嗜向を抹殺した〈統一〉を作ること、それによって作られた、〈Justice, regularity〉などの通則には、肝心の〈spiritual elememt〉は宿らないのだということである。つまり「自分の周囲が偽で成立してゐる」（塵労三十七）というきめつけも、一郎が主張する〈Justice〉や〈真〉というものも、現実に生きる人間の、複雑な関係性や不可測性に対する想像力を欠いた、この断片のような性質のものに他ならないのである。そのような統一・形式化癖に取りつかれた一郎の眼

が、人間に対して〈研究的・猜疑的〉に働くとき、お直の変幻する無形式性は、その非人間性に対する絶えざる挑戦となる。

意味論的機能の多重化の方法は、一郎が愛用する〈実際問題・実際家〉ということばに最も明瞭に現われている。例えば、三沢が「精神病の娘さん」（兄十）の遺骸に接吻した、ということをめぐる一郎と二郎の、少しもかみ合わないまま長々と記述されている会話は、〈実際〉ということばの意味が二人の間でいかにくい違っているか、そして一郎がいわゆる常識的な「実際問題」（同十一）からはいかにかけ離れた人間であるかを示唆するものである。「彼は事件の断面を驚く許り鮮かに覚えてゐる代りに、場所の名や年月を全く忘れて仕舞ふ癖があつた」（同三）とは、常識的生活的レベルでの〈実際問題〉が一郎の意味する〈実際問題〉ではないということである。では一郎がどのように〈実際〉という語を用いているか、は、Hさんからの手紙に明らかに見ることができる。

兄さんはたゞ自分の周囲が偽で成立してゐると云ひます。しかも其偽を私の眼の前で組み立てゝ見せようとはしません。私は何でこの空漠な響を有つ偽といふ字のために、兄さんがそれ程興奮するかを不審がりました。兄さんは私が偽といふ言葉を字引で知つてゐる丈だから、そんな迂闊な不審を起すのだと云つて、実際に遠い私を窘めました。兄さんから見れば、私は実際に遠い人間なのです。

（塵労三十七）

一郎は「その偽を組み立てゝ見せようとは」しない。つまり事実の具体性には関心がないのである。またこの引用部分の直前の「細君に対する不快な動作」を「敢てするに至つた原因に就いては、具体的に殆んど何事も語らないのです。」という、Hさんの報告から輪郭化されてくるのは、一郎という人物が、錯綜した因果の網の目の絡み合う、総体としての個々の現象には現実感をもつことができず、因と果を切り離し、全体から本体を抽出し、一般化し、具体性を欠いた〈偽〉という辞書的文字概念そのものに〈実際的〉な怒りを惹起するという、極めて特殊な抽象的性格だということである。つまり一郎は、比喩的に言えば、最も固有なるもの〈顔〉をあえて消し去り、一切の偶発的性格をもたぬ、〈顔〉のない普遍的抽象的概念そのものに感覚が凝集する人物なのである。それは過剰な観念性が、生動する現実との交渉の断絶を招来し、それによる、生活感覚の完全な転倒を意味している。この特殊な内面性こそ、『行人』において漱石が創出したオリヂナルな人格であると言い得る。

（二）鑑賞と鑑定

「精神病の娘さん」のエピソードは、この話の当事者である三沢の口から伝えられた後、一郎と二郎、それぞれにおいて、その意味機能を多重的に発揮する。

一郎にとってこのエピソードのもつ意味は〈女の本音〉という問題に帰着する。つまり人間は精神病などで「世間並の責任」（兄十二）が消えてしまえば「純粋」なことばだけを言うようになる筈だ、というのが一郎の解釈である。しかしこの解釈の当否よりも、それに同意を求められた二郎が「自分は何となく躊躇しなければならなかつた。」（同）と言っていることの方が重要である。一郎が

現実に起った出来事を解釈してみせる例がもう一つある。父親の語った「女景清の逸話」（帰ってから十三）の中で、なぜ男が一度肉体関係をもったその女を捨ててしまったのかという事についてである。この時一郎は「進化論」（帰ってから十九）と「世間の事実」（同）という「原則」（同）に照らして「男は情欲を満足させる迄は、女よりも烈しい愛を相手に捧げるが、一旦事が成就すると其愛が段々下り坂に」なる、という自説を展開し、この場合はお直に言下に否定されている。

この二つの現実の例を通じて一郎が犯した誤りの性質は「学問ガアッテpractical ニ役ニ立タヌ人」特有のもので「学問ハ（人事上ノ）delicate ナ区別ナシ、実際ノ事ハ非常ニ delicate ナ区別アリ、analogy ハ決シテ起ラズ、反応モ決シテ same ナラズ」[注7]という健全な現実認識が一郎に欠けていることを表わしている。

human being ヲgovernスル law ハ（モシアリトスルモ）毫モapplicationガ利カナイ

のであることを一郎は理解していない。一郎には、個々に生起する現実の事象の固有性あるいは一回性に対する感受性が完全に欠落しており、この二つの解釈も、理知の反復による弾力を失なった精神の有り様を如実に示している。これに対してお直は「六づかしい理屈は知らないけれども」〈実際問題〉に即して、そのようなことが「世間の事実」などではないことを主張しているのであり、またその否定の激しさによって、このような性質の社会通念に対する場合の一郎の、家父長的俗物的鈍感さの一面を照らし出している。このように、二郎とお直の二人によって、一郎の知性の偏狭性が異化されているのである。すなわち一郎という人物を正確に捉えるためには、彼の観念の過剰さに注目するばかりでなく、彼について何が書かれていないか、その書かれざる空白、つまり過剰さに対する欠落の性質に対する留意をこそ必要とする。『行人』においては空白もまた作者の技法だからである。

「精神病の娘さん」の話が、自分にとって大きな意味をもつことに、それがまさに自分自身の問題でもあることに二郎がやっと気付くのは家を出た直後である。

自分は力めて兄の事を忘れようとした。すると不図大阪の病院で三沢から聞いた精神病の「娘さん」を連想し始めた。

（帰ってから三十一）

この部分で、「其女の精神に崇つた恐ろしい狂ひ」（同）は、お直ではなく、兄一郎の〈狂〉との連想関係にあることに注意したい。つまり二郎にとってこのエピソードは、妻を「精神病に罹らして」「本音」（同）を吐かせようとする、精神に〈狂〉の来かけた一郎と、その〈淋しい妻〉お直のメタファアとなるのである。そのため、

もし其女が今でも生きて居たなら何んな困難を冒しても、愚劣な親達の手から、若しくは軽薄な夫の手から、永久に彼女を奪ひ取つて、己れの懐で暖めて見せるという強い決心が、同時に彼の固く結んだ口の辺に現れた。　（帰ってから三十一）

という、この場面の、三沢の「強い決心」とは、二郎の感情移入に他ならず、それが二郎の現在の心理と類比的だからであることが示唆されているのである。すなわちこの「精神病の娘さん」の話は、三沢・一郎・二郎と、三様にその意味を変容させることによって、

次第に意識化されてゆく、二郎のお直に対する愛情を暗示するものとなっているのである。

意味論的多重機能という『行人』の方法は、一郎と二郎、それぞれが抱くお直像に至って主題化している。「何んな人のところへ行かうと、嫁に行けば、女は夫のために邪になるのだ」「幸福は嫁に行つて天真を損はれた女からは要求出来るものぢやない」（塵労五十一）というのが一郎の結婚観であり「天真を損われた女」というのがお直に対する理解である。この場合「一体何んな人の所へ嫁に行ったのかね（お貞さんが――関谷注）」というHさんの素朴な〈実際問題〉は一郎の視野にはない。また三沢の語る「精神病の娘さん」の話が、不幸な結婚によっても決して「邪」になれず「天真を損われ」なかった女の例であることも〈女の本音〉の問題にこの話を統一した一郎は理解していない。「統一病」[注8]の一郎には、現実の個々の顔が見えないからである。

「天真」という語は、篇中に二度現われている。もう一例は、雨の降る夜に二郎の下宿をお直が訪問した後の二郎の、次の両センテンスにはさまれた感想の中にある。

○自分は此の間に一人の嫂を色々に視た。

○一人の嫂が自分には斯う色々に見えた。　（塵労六）

「一人の嫂が色々に見えた」というのは「自分は夫位活きた彼女を夫位劇しく想像した」（塵労五）ということばとも全く同義であって、そこに前提とされているのは「活きた彼女」なのである。すなわちこの二つの文にはさまれた部分が〈統一・形式化〉を拒む、人間の豊かな〈中味〉の表現となっている。「落付」「品位」「寡黙」「忍耐」「気高さ」という、お直に対する感動の列挙のうちに二郎は「彼女の今迄の行動は何物にも拘泥しない天真の発現に過ぎなかつた」ことに思い至る。この場面に、人間を理解するということは、一人の人間が「色々に視え」ること、そしてそのすべてが「天真の発現」であることに気付くことに他ならないこと、またそれは愛と共感によってのみ可能であることを、一郎の猜疑的・研究的な精神との対比において作者は示唆している。「恋愛主体は相手をひとつの『全体』（秋の日のパリと同じような）として感じとる」[注9]ということなのだ。次のような断片がある。

○鑑賞と鑑定

鑑賞は信仰である。己に足りて外に待つ事なきものである。始から落付いてゐる。愛である。惚れるのである。

鑑定は研究である。何處まで行つても不満足である。諸々を尋ねあるき、諸方へ持つて廻つて遂に落ち付かない。猜疑である。探偵であるから安心の際限がないのである。（大正五年）

つまりお直に対して終始「鑑賞」的な二郎は「天真を発現」する女と見、お直に対して「鑑定」的な一郎は「天真を損われた女」とお直をみたのである。とするならばお直について「何處まで」も〈不満足かつ猜疑的〉な一郎の、「女は腕力に訴へる男より遥に残酷なものだよ」（塵労三十七）という「苦痛」（同）の訴えの本質は、人間的情愛を欠いた研究的・探偵的発想によって〈女の本音〉を知ろうとする、被害の仮象の下に隠れた、観念化されたブルータリズム以外のものではない。

(三) Hさんの手紙と『思ひ出す事など』

Hさんの手紙は、これまでに検討してきた長野一郎の、現実感覚の喪失に基づく荒廃した内面の光景を余すところなく伝えている。この手紙から判明する、一郎の生の苦痛の実体とは、縮約的に言えば、知的エリートとしての理知の作用による〈自己絶対化〉の情熱に取りつかれながら、肝心の〈自己〉なるものが衰弱し、希薄化しつつある、というデレンマにあると言ってよい。

手紙は、「邪念の萌さないぼかんとした顔」（塵労三十三）を見る喜び、あるいは「香厳」（同五十）のような悟道の僧への憧憬、また「あの百合は僕の所有だ」（同四十七）の如き奇矯な物言いなどを通じて、一郎の、自己回復への悲願を報告しており、また「物を所有する」ことが「必竟物に所有される」（同四十八）ことに等しい〈絶対の境地〉に出逢うことが〈病める人〉一郎に対する唯一の処方であると言っている。このような意味における〈絶対の境地〉は、おそらく漱石が修善寺の大患を通過することによって得た発想である。[注10] 大患とその回復過程の記憶を素材とする『思ひ出す事など』（明治四四年）には、「秋の江に打ち込む杭の響かな」などの句に見られるような、一郎の願って止まない〈境地〉が繰り返し幾度も思い起されていることが注目される。

> 何事もない、又何物もない此大空は、其静かな影を傾けて悉く余の心に映じた。さうして余の心にも何事もなかつた。又何物もなかつた。透明な二つのものがぴたりと合つた。
>
> （『思ひ出す事など』二十）

この「可い気分」（同）は、「宿なしの乞食見たやうに朝から晩までうろ〳〵している。二六時中不安に追い懸けられている。」（塵労三十三）という一郎の心的状態と対極をなすものである。「余」はこの記憶を「単に貧血の結果」と相対化しつつやはりそれを「幸福の記念」として懐しんでいる。『思ひ出す事など』に頻出するこのような〈幸福〉は、次のような文脈のうちにある。

> 斯く凡ての人に十の九迄見放された真中に、何事も知らぬ余は、①曠野に捨てられた赤子の如く、ぼかんとして居た。②苦痛なき生は余に向つて何等の煩悶をも与へなかつた。③余は寝ながらたゞ苦痛なく生きて居るといふ一事実を認める丈であつた。
>
> （『思ひ出す事など』十六）

傍線①「赤子の如くぼかんとして居た。」は、先述した、一郎の憧憬する「邪念の萌さないぼかんとした顔」（塵労三十三）に照応している。傍線②「苦痛なき生」は傍線①の「曠野に捨てられた赤子」との対応関係にあり、同じ関係は『修善寺日記』（明治四三―四四年）にも見られるものである。

> 静かに衰弱の回復を待つはまだるこき退屈なり併せて長閑なる美はしき心なり。年四十にして始めて赤子の心を得たり。此丹精を敢てする諸人に謝す。

ここでも「長閑なる美はしき心」という〈幸福〉は「赤子の心」と対応している。そしてこれら「長閑なる美はしき心」あるいは、先の引用部分の傍線③「たゞ苦痛なく生きて居るという一事実を認める丈」という意識状態は、長野一郎が苦しんでいる、自意識の過剰さとは最もかけ離れた、自意識の極端な衰弱を示しており、それは

生死の境にある肉体の限界状態に基づいている。そのような、肉体と自意識、双方の極小の状態が「曠野に捨てられた赤子」に喩えられているのであって、〈幸福〉はその赤子としての始源的生命感にこそ訪れたのである。「余」はその時まさに始源の生命の営みそのままに「熬りつく様な渇」（二十六）や「恐ろしい餓じさ」（同）を経験することができ、また一方で「子供の時と同じ様に」「絶えず美しい雲と空とが胸に描かれた」（二十四）のだった。

『思ひ出す事など』は、大患という〈偶然にもたらされた休息〉によって始源的生命感を獲得した漱石の喜びと、またそれを発条として、自己の周囲に広がっていった新しい感受性の沃野の発見の感動とを繰り返し伝えている。また、もう一つのこのエッセイのテーマに他者との共生感をあげることができる。病床の完全な無力の中で「余」は病床に近くまた遠く関わってくれた多くの人々の好意を通じて、新しく生じたそれらの人々との連帯感の中で、〈類〉としての自己を見出した喜びをも飽くことなく語っている。

余はたゞ仰向けに寝て、僅かな呼吸を敢てしながら、怖い世間を遠くに見た。病気が床の周囲を屏風の様に取り巻いて、寒い心を暖かにした。

（『思ひ出す事など』十九）

時代の要請を荷って、〈理知〉の申し子のように、近代的個我としての自意識をとぎすまして来た結果、〈個〉は必然的に〈類〉としての側面を次第に剝脱してゆき、自己絶対化・独創化の魔となり、他者との連帯感の欠落のうちに暖かい血を枯らしてしまう。漱石は病床にあって、人々の善意に見守られながら、人間的情愛から遠い場所にいた大患以前の自己の、こうした畸形な精神の有り様を内省したに相違ない。とりわけ機能と化した自意識が、決して動態としての現実を捉えはしないことを。機能化した自意識は、自然的なもの、始源的なもの、生成し、生長するすべてのものと限りなく遠ざかる精神のメカニズムだからである。

「私の親愛するあなたの兄さんのために」「兄さんを親愛する貴方のために」「慈愛に充ちた御年寄、あなたと兄さんの御父さんや御母さんのために」（塵労五十二）というHさんの手紙の最後の部分の反復は、一郎の〈理知〉が見捨ててきた、全く別種の秩序と価値感を暗示するものとなっている。しかし「年四十にして始めて赤子の心を得たり。此丹精を敢てする諸人に謝す」と書かせた、漱石の〈偶然的衰弱〉は一郎のものではない。

もし彼対我の観を極端に引延すならば、朋友もある意味において敵であるし、妻子もある意味において敵である。さう思ふ自分さへ日に何度となく自分の敵になりつゝある。疲れても已め得ぬ戦いを持続しながら、茫然として独り其間に老ゆるものは見惨と評するより外に評しやうがない。

（『思ひ出す事など』十九）

この部分が「彼対我の観を極端に引延」し「僕は絶対だ」（塵労四十四）と叫びつつ次第に狂的になってゆく長野一郎の生の苦痛の最も的確な概括に他ならず、また負性としての明治の近代化をあざやかに切り取ったことばとしても比類がない。既に明らかなように、長野一郎は『思ひ出す事など』によって思い出されている大患以前の「余」の、小説的に誇張された像なのである。だから一郎に欠落しているものも『思ひ出す事など』を貫く大きな二つのモチーフ、

始源的生命感の回復と、〈類〉としての自己の再発見の二点に集約されるのである。

一郎は病の代りに旅という非日常的時間・空間の中で「蟹」や「百合」や「森や谷」にわずかに魂を奪われることができた。また風雨の中を「わあつ」と叫びながら「突進」してゆく一郎の姿は〈赤子〉そのものであって、この時一郎の発した「原始的な叫び」（塵労四十三）と「余」が病床で獲得した始源的生命感の照応が見られる。共に、外なる自然と内なる意識との相互浸透状態が実現しており、「余」は「幸福」を、一郎は「痛快」を感じたのである。しかしこの「痛快」も束の間のものであり、一郎には「第二の葬式」[注11]（『思い出す事など』三十二）として、「古臭い愚痴」（十九）を葬る契機は訪れそうもない。なぜなら「四十を越した男、自然に淘汰せられんとした男、左したる過去を持たぬ男」（同）という自己規定を媒介として、他者との共生感を回復し得た「余」に対して一郎は「人間全体の不安を、自分一人に集め」（塵労三十三）「百尺竿頭に上り詰めたと自任する人間の自惚」（『思ひ出す事など』七）を未だ辛うじて保持しているからである。彼は「絶対」だからである。自己絶対化へ組織化された精神は、自律的存在としての他者を消すことを究極の目的とする。そこにはたゞ不毛に自己を細分化して止まない、観念の過剰があるばかりである。したがって長野一郎は、生活の全現実の中において己れを見得る、真に醒めたる知性とは無縁である。

では、そのような人物、一郎が関心を集中させていた、妻お直の〈本体〉あるいは〈本音〉とは何を意味していたかは決して自明のことではない。一郎が欲していたものは、一人の人格としてのお直の心の表白ではなく、もっと即物的かつ直接的な意味における、お直の心理的な〈反応〉ないし〈手応え〉に局限化されていたことが推測される。「一度打つても落付いてゐる。二度打つても落付いてゐる。」（塵労三十七）という一郎のことばはこの推測を正しく裏書きするものである。だとすれば、お直が自分を自嘲的に言う「魂の抜殻」（兄三十一）「腑抜」（同三十二）「馬鹿」（塵労四）などの語は、そのような夫の鑑定的非人間的処遇に抵抗し得る唯一の方法、すなわち〈反応を拒む〉という意志を含意することばとして首尾一貫しているのである。だから二郎はそこに「測るべからざる女性の強さ」を、つまりことばとは裏腹の強い意志を感じ取ったのである。二郎に対しては、お直がいかにしなやかに〈反応〉しているかを見るべきである。

「御前の考へなんか聞かうと思つてゐやしない」（兄二十一）という一郎のことばは、必ずしも二郎にのみ向けられたものではなかった筈である。なぜなら、これこそが一人称的世界に自らを閉ざした人間の〈本音〉に他ならないからである。

（四）一郎の企て

兄は谷一つ隔てゝ向ふに寝てゐた。是は身体が寝てゐるよりも本当に精神が寝てゐるやうに思はれた。（帰つてから一）

二郎が「今でも不審の一つ」と言う、一郎のこの関西の旅の終りの眠りと、Hさんの手紙に反復されている一郎の〈深い眠り〉は、その、一種過度な感じによって、逆に、醒めている時の一郎の意識

の過度な明視性を暗示している。また言い換えれば、一郎には「ぐうぐう寝てゐる」（塵労五十二）か、あるいは過度に醒めているかのどちらかしかないということになる。つまり一郎には〈半睡半覚〉の状態が無いのである。[注12] このことから直ちに連想されるのは、意識の〈半睡半覚〉の状態から物語が始まる『それから』である。〈半睡半覚〉の時、意識は、時間・空間意識のゆらめきの中で、遠い昔の場所と現在の場所との間を、そして無時間的な時間をさ迷う。比喩的に言えば、三千代はそのような時空の境に〈再現の昔〉として代助を待っていた女である。とするならば、一郎はこのような意味で現実に位置づけることのできない、特殊な、しかし人間にとって本質的な、無時間的永遠の現在を現前させる、意識の浮遊状態をもつことのない人間だということになる。このことはまた、一郎には過去に関する記述が全く見られないことと軌を一にする問題である。すなわち一郎は、〈思い出す事〉をもたない唯一の主要人物なのである。

二郎はお直と共有の記憶をもっており（兄三十二）、家を出る時には、兄一郎と共に過した少年時代の記憶を呼び起している（帰ってから二十五）。三沢もまた美しい「過去の詩」（塵労十六）を未来に「投げ掛け」ることのできる青年である。生活の中で、過ぎてゆくことのないこれらの記憶を仮に〈固有時〉と呼ぶとすると、人間の意識が、現在という時間枠の中から解放される機会は、そのような〈固有時〉との出逢い及び対話による他はない。したがって〈固有時〉をもたない一郎は現在という時間枠から一刻も解放されることがない。つまり一郎の「牢獄」意識（兄十六）とは、空間的な意味よりはむしろ時間的な意味合が強いのである。

このような意味における牢獄意識は、明治二十年代に青春を過した知的エリート達に共通のものであった。明治の近代化を荷うエリートとしての使命感が生活的自我の成熟を犠牲にしたのである。生活が「目的」（塵労三十二）のための「方便」（同）と化し、生活そのものの自己目的性が無意味化されたのである。このことに関する興味深い断片がある。

○24 hours-constant

○Work to go through in a day-insessant increase.

○Natural conclusion.

（波線関谷―明治四十三年仲秋より明治四十四年初夏頃まで）

試訳すると、一日をただ通過するために働く、そのような日が間断なく積もり積もってゆく、〈その結果〉は、という意味になる。そのような人生は無きに等しいのである。そこには〈真の経験〉が放棄されているからである。[注13] 一郎の人生もまさにこのようなものであったことが推測し得る。そして、Hさんの手紙に伝えられる、一郎の現在の内面の有り様が〈その結果〉なのである。「何を何うしても、それが目的にならない計りでなく、方便にもならない」（塵労三十一）という「不安」（同）が極限まで激成されたのである。この種の「不安」は、例えば次のような空虚感と根を等しくするものである。

生れてから今日まで、自分は何をしているか。―中略―策うたれ駆られてばかりゐる為に、その何物かが醒覚する暇がないやうに感ぜられる。勉強する子供から勉強する学校生徒、勉強す

る官史、勉強する留学生といふのが、皆その役である。—中略—此役が即ち自分の生だとは考へられない。（森鷗外『妄想』明治四十四年）

彼らは共に、時間的には〈現在〉という牢獄に、空間的には〈図書館や大学〉という牢獄に閉ざされた生だったのである。すなわち彼らは人間の生活の埒外にいる者として、それらを観察・研究する者として生きてきたのである。〈生〉への多感は失なわれ、一郎にとって〈生〉は、抽象化され、一般化されるべきものとしてのみ存在することになった。一郎の精神の畸形化への道筋はこのようなものであったと想像される。

したがって、一郎の苦痛の最も内奥のものとは、人生を侵蝕する〈現在位相〉の中に封じ込められたまま、「疲れても已め得ぬ戦いの持続」のうちに「独り」無意味に消滅してゆかねばならないという存在感覚であったことが自ずと推測され得る。そのように生きてきた一郎が渇望したものは、Hさんとの旅で比喩として〈経験〉することができた、大自然との対決の内面化、すなわち破壊的威力をもつ無時間的〈運命〉の到来であった。〈運命〉という破壊力によって、真空化・均質化しつつある精神生活に、観喜や悲嘆などの、原初の声を呼び起そうと願ったのである。だから一郎が二郎に「直の節操を御前に試して貰ひたい」（兄二十四）と依頼した真の目的は〈疑い〉を〈現実化〉すること、つまり〈運命〉を自ら作ることによる、純粋な現在位相からの遁走の企てであったということ以外には考えられない。〈節操を試す〉という名分に隠れて、二人の仲が本当になる、という自虐的な形の〈生〉の〈手応え〉をひそかに期待したのである。そのことによって、パオロとフランチェスカを、密会の現場で刺し殺した、フランチェスカの夫ジアンチオット[注14]の激情をわがものとし、〈自然の膂力〉（帰つてから二十八）が蘇ってくることを願ったのである。しかし皮肉なことに、二人の強められた連帯感によって一郎は〈手応え〉を得ることができず、自己劇化の企ては失敗に終る。これが『行人』に内在する最大のドラマである。「『姉さんの人格に就て、御疑ひになる所は丸でありません』」（兄四十四）という二郎の答えに対して一郎が「急に色を変へた」こと、そしてまた「『己は一時の勝利者にさへなれない』」（帰つてから二十九）という呟きは、一郎のこの〈真の企て〉を証するものである。しかし〈運命〉を自ら作ろうとしたことこそ、一郎の、人間としての最大の傲慢だった。それに対してお直は、〈運命〉とは待つものであることを知っている。自己の「囚はれない自由な」（塵労六）魂を虐げる因襲的な外界に対して、次第にそれらに馴致されるのでも、厭世的になるのでもなく、外的状況と内面的に結びつくことのできる、その瞬間を待つこと、その精神的緊張の持続を日常のものとして生きることこそが、人間的腐食や頽廃を突き抜け得る唯一の方法であることを、〈損われない天真〉のうちにつかみ取っている。だからお直は「いつでも覚悟が出來て」（兄三十八）おり、「落付いて」二郎を見つめていることができたのである。お直こそが、まさに〈運命的な人〉なのである。そして二郎はその〈自然の膂力〉によって、自ら知らずに〈運命〉を引き寄せてゆく。

しかしHさんからの手紙は、二郎の思惑とは隔絶した、おそらく

二郎の想像を絶する類の、病める魂に関する報告だった。そうした一郎の、全く孤独な内面を他に伝えることのできたことについてHさんは「偶然は遂に私の手を導いて」（塵労二十八）「偶然を利用して」「此偶然を思ひ掛なく」「全く偶然の御蔭」と、〈偶然性〉を反復強調している。この〈偶然〉は、次のような三沢のことばに呼応している。

「『知らないんだ。向は僕の身体を知らないし、僕は又あの女の身体を知らないんだ。周囲に居るものは又我々二人の身体を知らないんだ』」（友達二十一）

〈偶然〉知ることはできた、しかし三沢の病気は回復しても、一郎の場合は、他の容喙を許さぬ、病める〈絶対者〉の煩悶であったため、悲劇へと向う他はなく、「深く懺悔したいと思う」（兄四十二）、「人格の出來てゐなかった当時の自分には」（同四十三）、あるいは「此眠方が自分には今でも不審の一つ」（帰ってから二）などの、決定的な悲劇に至る文脈がすでに用意されていたのである。物語は、長野家の日常の崩壊を予感させ、その決定的な出来事の語られる直前で終っている。弟二郎の語りの機能はそこを限界としたのである。

作者は『行人』において、「一人の人間が二人になると、一人でゐた時よりも人間の品格が堕落する場合が多い」（帰ってから六）などと言おうとしたのではない。一郎・二郎・お直、三者それぞれの生存の〈固有性〉が、一つの〈運命〉の意味を、まさに多元的に増幅させてゆくプロセスを通じて、作者漱石の近代的個我としての独創性と天才性とが切り捨ててきた〈最も身近な他人〉への通路を暗示しようとしたのである。

長野一郎は、専門化・細分化の激発の道を歩んだ近代日本の使命感を〈真面目〉に生きた、知的エリートの畸形的実相に他ならず、そのことによって〈近代的自我〉というものの再検討のための最も有効な問題化の方途をわれわれに提出している。漱石は、講演『現代日本の開化』（明治四十四年）の中で、内発的な開化を「丁度花が開くやうにおのづから蕾が破れて花弁が外に向ふ」という喩えで語った。だとすれば、この講演の中に「グロテスクなものをうみだすには進化を短縮すればよい」[注15]というもう一つの声を聞き取ることも容易な筈である。

注

注1　F・シュタンツェル『物語の構造』（前田彰一訳　岩波書店一九八九・一）

注2　例えばお直の片えくぼについて、伊豆利彦氏は「そこに淋しいお直の心を見たのは二郎だけだった。」（傍点関谷「『行人』論の前提」『日本文学』一九六九・三）、と極めて示唆的な見解を述べている。

注3　二郎とお直の恋愛を、一方の主筋であるとする説は、橋本佳「『行人』について」（『国語と国文学』一九六七・七）が画期的なものであり、この問題についてはこの橋本論文にほぼ尽きている。

注4　例えば、Hさんが「マラルメの椅子」（塵労三十八）を、〈〜でなければならない〉という一郎の窮屈な生き方の比喩

として言ったのに対して「椅子位失つて」と答える一郎はこの比喩が分っていない。

注5　二郎が「雅楽所」（塵労十八）で見る「N侯爵」「K公爵」は一郎と二郎のどちらにも無関係であって、これら一郎に関するアルファベットと全く性質を異にする。

注6　『思ひ出す事など』にも『中味と形式』と同様オイケンを例として批判している。

注7　「断片」（明治四十五年五月十六日より同十二月頃迄）

注8　「断片」（―明治四十三年仲秋頃より明治四十四年初夏頃まで―）に「○統一病。Phenomenal world.」というのがある。また『思ひ出す事など』にもオイケンを「統一病」と言っている。

注9　ロラン・バルト『恋愛のディスクール・断章』（三好郁朗訳　みすず書房　一九八〇・九）

注10　江藤淳はHさんの手紙の中の「絶対の境地」が「奇妙なことに、修善寺に於ける漱石の天賓を想わせる」（『夏目漱石』勁草書房一九六五・六）と指摘している。

注11　「第二の葬式」において葬られる「余」とは〈大患以前の一郎的側面における「余」〉であることは疑がない。

注12　二郎が一郎に、家を出る事を告げに書斎へ行く場面で、二郎の「意識朦朧」（帰つてから二十六）状態がかかれていることには作者の深い留意が感ぜられる。

注13　○Experience. 生の内容は experienceナリ。（「断片」明治四十二年一月頃より六七月頃まで―）。∴Experience inportance イクラ philosopher デモ action ノ助ケニハナリニクイ、philosopher ハ form カラ contents ヲ逆ニ inspire シナケレバナラナイ、（「断片」明治四十四年五月十六日より同十二月頃まで―）

注14　「フランチェスカ」（『ダヌンチオ全集』I所収　鷲尾浩訳　冬夏社　一九一五年四月）に拠る。

注15　バシュラール『空間の詩学』（岩村行雄訳　思想社　一九六九・一）